O7-2

頭部外傷後遷延性意識障害患者に対する看護プログラム実施における効果

水元　志奈子[1]、三崎　律子[1]、西郷　典子[1]、大前　綾子[1]、片岡　恵美子[1]、松村　望東美[1]、
八木　良子[1]、本田　千穂[2]、萬代　眞哉[2]、衣笠　和孜[2]

[1]独立行政法人　自動車事故対策機構　岡山療護センター 看護部、
[2]独立行政法人　自動車事故対策機構　岡山療護センター　診療部

【はじめに】自動車事故対策機構（以下NASVA）による看護（紙屋）プログラムの試験的導入に伴い、当センターでも看護実践を開始することになり、意識レベルの異なる5症例に対して看護プログラムを実践した。その結果、効果がみられたので報告する。【研究方法】対象：1. 頭部外傷後遺症による意識障害患者で入院後1年以上経過し症状が固定傾向にあること。2. 著しい低栄養、骨折や感染症などの大きなリスクがないこと。3. 家族の同意が得られていること。これらの項目を満たした意識レベルの異なる患者5症例。方法：4週間を1クールとし看護プログラムを実施。RYOUGO　NURSING　PROGRAM評価表（以下RNP評価表）・NASVAスコア・広南スコア・皮膚温・筋硬度・ROM測定にて実施前後で評価した。【結果】RNP評価表では全患者においてすべての項目で1点～19点、4項目合計では4点～30点の変化があった。NASVAスコアでは1症例に、広南スコアでは3症例に変化があった。全ての患者に表情変化が見られた。【考察】今回意識レベルの異なる5症例に看護プログラムを実施し、全ての患者に表情の変化が見られた。これは、口腔周囲筋のマッサージや僧帽筋への用手微振動により表情筋がほぐれ、表情の表出が容易になったと考える。呼びかけに対する反応は、頻度と速度、明確性が5症例中4症例に変化があり、看護プログラムを行うことでサーガディアンリズムが整い、覚醒レベルが向上し認知機能の改善につながったと考える。入院後1年以上が経過した慢性期の患者においても、生活行動再構築につながる第一歩になった。